

作家 William March と彼の生きた時代

高 橋 順 子

William March を米国史の中に生きた一市民として記述するならば次のようになる。

本名：William Edward March Campbell (彼は自分の著作に William March という名を使った。March は母方の姓である。)

生年月日：1893年9月18日

出生地：Mobile, Alabama

最終学歴：Alabama 州立大学法学部中退

軍隊歴：U. S. Marine (Sergeant) 第一次世界大戦参加

褒賞：第一次世界大戦時の殊勲として

the Distinguished Service Cross

the Navy Cross

the Croix de Guerre with Palm

職歴：Waterman Steamship Co. (1920—1938)

病歴：戦争後遺症による神経衰弱

死亡年月日：1954年5月15日

死亡地：New Orleans, Louisiana

主な作品：Company K (1933)

The Tallons (1936)

Some Like Them Short (1939)

The Looking Glass (1943)

The Bad Seed (1954)

William March は1893年、Campbell 家の11人の子供の第二子として Alabama 州 Mobile で生れた。父は Alabama 州や Florida 州の小さな町を転々とする製材職人であった。March の少年時代、一家は常に貧しく、長男であった彼は14才の時から製材所で働きはじめ、19才の時自分の学費を得るために New York へ出て働いた。1917年に米国が参戦した第一次世界大戦に U. S. Marine として出征し、復員後は新しく創設された汽船会社 Waterman Steamship Co, に入り businessman として頭角を表わし、副社長にまでなったが1938年45才で引退し、文筆生活に専念することになった。その後もずっと New York に住んでいたが、1947年に病いを得て故郷の Mobile に戻り、後にフランスの面影を残す New Orleans に移り、1954年肺炎のため死亡した。享年60才であった。彼の最後の作品 *The Bad Seed* はベストセラーとなり、舞台化され、映画化もされたが、それらのできごとはすべて彼の死後のことであった。⁽¹⁾

第一次世界大戦は1914年、March が New York の法律事務所で働きながら学費を作っては大学を続けていた頃、すでにヨーロッパで始まっていたが、当時の米大統領 Woodrow Wilson は中立政策をとっていた。当時、20世紀初頭のアメリカでは、人口の1/3以上が外国生れ、または初代移民の子供たちであり、彼らのほとんどはヨーロッパ系の移民であったため、ヨーロッパでのトラブルに巻き込まれるのを恐れたからであった。当時のアメリカの人口は9,200万で、その人口構成からみても、Central Powers のドイツ、オーストリア系は約800万人、イギリスへの憎しみのためにドイツ側に味方していた Irish-American は450万人で、その他の大勢は連合軍側に味方していた。そのような事情の中で、ドイツ側も連合側も共にさまざまな運動や宣伝をして、アメリカを味方につけようとした。

相方共アメリカの経済資源に大いに期待していたからであった。特に連合側は開戦後すぐに資金不足となり、アメリカの銀行から借入しなければならなくなった。それに、ドイツの優勢、特にUボートによる損害の多さに悩まされ、イギリスは制海権を急速に失っていった。しかし、Wilson はなお、「アメリカを軍隊キャンプにしたくない。」⁽²⁾ とし、参戦に反対であった。

1915年5月、Uボート（U—20）がイギリスの商船 Lusitania 号をアイルランド沖で撃沈するという事件が起きた。1,200人近くが犠牲となり、その中には128人のアメリカ人が含まれていた。それ以前に Wilson 大統領は秘密特使をロンドン、パリ、ベルリンに送り、交渉によってこの戦争を終結させる努力をしていたが、この Lusitania 号事件で交渉は決裂してしまった。翌年第二団の特使が派遣されたが、両側とも軍事的勝利を主張したため、再び実らずに終わってしまった。

1917年になると、ドイツのUボートは100隻以上に増え、ドイツは制海権を握り、ドイツ軍に包囲された形になったイギリスは窮地に陥り、連合側にアメリカの援助が届くのは困難になってきた。同年4月、アメリカ議会はついに参戦を決議した。Wilson は、復しゅうや勝利のためでなく、正義と人道のためであるという名のもとに出兵することにした。⁽³⁾ 当時 March は24才、New York で働いていたが、このため大学を続けることを断念してアメリカ海兵隊に入隊し、訓練を受けたと思われる。同年7月には最初のアメリカ部隊がパリに派遣された。

Wilson はアメリカの微妙な立場を考慮して、連合側を“allies”⁽⁴⁾ ではなく、常に“associates”⁽⁵⁾と呼んでいた。前者は共通の理由（この場合は Central Powers を敵として）で合同して共に戦う国々を意味し、後者は同じ行為に提掲している者、仲間というように、アメリカとしては連合側との間にひとつの距離をおいた表現であった。この表現を実証すべくアメリカ軍は、各戦場において連合軍には加わらず、常に単独で戦った。そう

することによってアメリカは自国の立場を守ろうとしたのであるが、このような姿勢は、結果的にアメリカの孤立主義を提示することになった。

1918年6月、アメリカ軍はフランスの Château-Thierry と Belleau Wood でドイツ軍と戦い勝利を取めた。Belleau Wood の戦いには24才の March も参加していて、負傷した。この時、彼はドイツ軍の使用した毒ガスを吸い、生涯その後遺症に悩むことになった。⁽⁶⁾ 第一次世界大戦でドイツ軍のガスを吸って神経に異常をきたし、その後遺症に悩まされた例は多いと思われる。Sherwood Anderson の短編 *Nice Girl* にもその例が出てくる。主人公 Agnes の兄 Harry は第一次大戦に参加し、ガスを吸い、肺に異常をきたし、アルコールにおぼれ、何もできずに暗い生活を送っている人物として描かれている。

アメリカは最初は3万たらずの出兵であったが、次第に数を増し、March も再び参加した9月の Argonne Forest の戦いではその数は120万に上っていた。この戦いだけで米軍には12万の死傷者が出た。この戦いは米軍による第一次世界大戦最大の作戦となり、東からは米軍、西からは英仏軍がドイツ軍を追い上げ、押し返した。約2ヶ月後の11月にドイツが降服し、戦いは終わった。この大戦におけるアメリカの損害は、死者11万、負傷者23万であった。(しかし、死亡者のうち、半数以上は戦病死であった。) 一方、自国が戦場となったヨーロッパ各国の被害は著しく、イギリスは95万、フランスは140万、ロシアは170万、イタリアは46万の死者を出した。ドイツは180万、オーストリアーハンガリーは120万、トルコは32万で、さらに相手総計2,000万の負傷者を出した。⁽⁷⁾

1919年8月、三つの大勲章に輝いて March は復員した。March の出世作は *Company K* である。この作品は、彼が従軍中に姉に書き送った手紙をもとに書いたもので、第一次大戦文学の中でも高く評価されている。また、彼の短編集 *Some Like Them Short* の中に *A Haircut in Tou-*

louse という作品があるが、これは彼が戦争終結後フランス南部の都市 Toulouse に派遣され、Toulouse 大学の School Department for American soldiers に参加した時の episode をもとにしている。この物語は、語り手（おそらく、March 自身）が Toulouse 大学で一緒だった仲間に、20年後の在郷軍人会でばったり会い、その男の Toulouse での思い出話を聞くという形で進められる。若いアメリカの青年が、米国史上初めて他国に赴いて、他国のために戦うという経験をし、勝利を収め意気揚々と異国（フランス）の床屋に行って、いかに自分を表現しようとしたかがこっけいな episode を通して、簡潔にしっかりとした outline をもって語られている。“I am free, white and twenty-one.” 大人になったばかりのアメリカ兵が、自分はもう一人前の大人であるという自負と、自分はアメリカ人であるという誇りをこめて、思い迷い、ともすれば揺らぎがちな自分の決断に、自分自身に言いきかせるこのセリフは、喜劇としてみるならば、こっけいであり、人情劇としてみるならば、愛すべき若者と映るのである。この物語の主人公 Decker は、おそらく WWI に参戦した American G. I. のひとつの典型であったであろう。

1919年1月、パリで平和会議が開かれ、5月にはベルサイユ条約が結ばれた。大戦は終わった。しかしその動揺は容易に収まらなかった。アメリカでは生産増大の著しかった戦争景気は終り、除隊者は無計画に労働市場に放り出された。戦争直後の1919年にはまだ景気はよかった。なぜならば戦時中になかなか手に入らなかったものを人々がさかんに買い求めるようになったからであった。しかし、物資不足はインフレを招き、物価は1920年には戦前（1913年）の二倍を越えるようになった。インフレはさらに続き、戦時中に力を増した労働組合によるストライキも続出した。農産物の物価は下がり、失業者は600万人近くになった。

アメリカでは、政府も国民もこの大戦に参加したことを後悔していた。

このような社会不安と経済不安の中で、さらに人々を不安に駆り立てた要素として、ロシア革命の影響による共産主義者の台頭、都市への人口流入による都市のスラム化、禁酒法の制定に対する社会的反動、Ku Klux Klanの復活などの諸問題があった。

当時、アメリカの共産主義者は10万人たらずであったが、ロシアで共産革命が起り、1919年にはモスクワで第三インターナショナルが開かれ、共産主義の波は全ヨーロッパ、そしてアメリカにも広がっていった。この同じ時期にアメリカではアナキストによる要人襲撃が相ついで起った。過激派のほとんどは移民であった。その結果として、今やアメリカの敵は、ドイツに代ってイタリア、ユダヤ、スラブ系などの貧しい移民たちが対象とされるようになった。そして、戦時の愛国心から今度は、100% Americanism⁽⁸⁾という激しく保守的な思想が生れた。この過激派と共産主義者とは関連がなかったにもかかわらず、共に社会不安をきたすものとされ、これらを排除すべきだという声が高まっていった。この動きは Big Red Scare と呼ばれ、取り締りの中心人物は Wilson 大統領政権の法務長官であった A. M. Dalmer であった。かくてアメリカに最初の red hunt が始まり、6,000人もの逮捕者が出た。しかし、この中で実際に追放処分になったのは600人たらずであった。アナキストや共産主義者の流入を防ぐためという理由で、1929年アメリカ議会は移民を制限する法案を作成したが、イギリスや北ヨーロッパからの移民は歓迎された。こうしてアメリカでは、homogeneous, Anglo-Saxon 人口を維持しようとする傾向が堂々と前面に押し出されてくるようになった。

1919年に禁酒法が立法され、1920年施行されたが、1933年に廃止されるまでの間、酒は大量に密造密売され、その流通をめぐる犯罪組織が台頭した。また、この1920年代には Ku Klux Klan (KKK) が復活し、南部を中心に黒人を圧迫し、迫害した。KKK は、黒人が政治に関与することを阻止しようとしたグループで、南北戦争後に Tennessee 州で起り、急

速に南部全体に広がった組織であった。その行動があまりにも過激で残酷であったために、議会で取り締り法案を作成し、会員の多くを検挙したため、1872年頃 KKK は開散していた。

Red hunt にしろ、KKK の復活にしろ、100% Americanism が招いた社会現象で、誤解と強い偏見に基き、厳しい経済不安の中でいたずらに社会不安に迫車をかける結果となった。1923年には、復活した KKK の会員は500万にまで登り、その迫害から逃がれようと、南部の黒人たちは New York, Philadelphia, Chicago などの北部の都市へ移っていった。1920年代にこれらの都市の黒人人口は倍以上になり、彼らが住みついた地域には ghetto ができていった。しかし、古い因習と白人の圧迫に満ちた南部を捨て、都会に出て、都会で仕事をし、教育を受けるようになったことによって彼らは次第に自立し、アメリカ市民としての真の力を培ってゆくようになった。文学の世界に例をとれば、本格的黒人作家のグループが生まれ、1940年にはその代表格であった Richard Wright によるベストセラー (*Native Son*) が出るようになる下地がこの時期から育まれていたと言えよう。1930年には KKK の会員は9,000人に減少した。⁽⁹⁾

第一次世界大戦終結以来、様々な問題をかかえて過ぎていった1920年代であったが、その終りにきてさらに大きな社会不案が待ちかまえていた。かねてから高騰しつづけていた株価が市場の動揺のため下がりはじめ、1929年10月24日、株価の暴落が起った。ちょうどその日は火曜日であったので、Black Tuesday と呼ばれている。この事件が世界恐慌の始まりとなるのであるが、Great Depression の真の原因は株式市場の崩壊ではなく、根本的には工業化と都市化にあった。富の増大は極端に片寄り、消費者の多くは生産されたものを買う力がなかった。購売力の低下で在庫は激増し、製造業者は工場閉鎖を与儀なくされ、解雇者が続出した。たとえば自動車産業では、年間生産台数が1929年の450万台から1932年には1/4の

110万台に落ちた。⁴⁰⁾

March の短編 *Bill's Eyes* はちょうどこのような時期のひとりの労働者の悲劇を描いている。不況のため労働者解雇の続く中で、Bill は家族を養うために解雇の対象にならないように一生懸命に働く。その結果、（おそらく働きすぎで過労になっていて、ちょっとした不注意があったであろう）自分が作業に使っていた道具が粉々に散って、その破片が目に刺さり、妻の嘆願によって高名な医者手術を受けるが、結果は失敗に終る。Bill は筋肉労働者としてのたくましい肉体と、気持の明るさ、人の良さを持ち、医者に対しては絶対の信頼と尊敬の念を抱いている。手術の結果が判る日、彼は医者に向って早くよくなって職場へ復帰したいと語り、自分の目の手術が失敗に終り、自分は永久に失明するということには全く考え及んでいない。そんな彼に医者は手術の結果をどう話したらよいか分らず、ながい沈黙のあとで、Bill が早く自分の目で見たいという医者自身の容姿を自ら説明しはじめる。自分の背丈、体格、髪の色、今日しているネクタイの模様など……。読者に同情と悲しみを募らせきった、ここで物語は終る。Bill は失業するであろうし、彼の家族はさらに貧困に喘ぐことになるであろう。この根からの善人 Bill も恐慌の荒波に巻き込まれた犠牲者であった。

工場閉鎖、従業員解雇は他の関連企業にも影響してゆき、多くの銀行も閉鎖された。1932年には全米の失業者は1,300万人にのぼった。経済不安の続く中で、地方で失業した人々の都市への流入が激しくなった。戦後の政府への不信、社会不安から逃れようとするかのように、ジャズがはやり、はなやかな服装がはやり、禁酒法下にもかかわらず酒が大量に出回り、Anglo-Saxon 系扁重の人種差別が激しくなり、まさに Roaring Twenties は戦争後遺症の時代であり、Great Depression への prelude の時

代であった。

このように激しく揺れ動くアメリカ社会で、女性の生活にも大きな変化が出てきた。この頃から女性はスカート丈を短かくし、外でタバコを吸い、酒を飲み、さらに高い教育を受けるようになり、男性との差は未だ歴然と大きかったが、職場への進出も著しくなった。

アメリカという大国の上辺だけが狂乱して浮き上がり、農業経済は第一次世界大戦以後衰退の一途をたどり、一般労働者の賃金は上がり、消費経済は停滞し、生産の機械化のため失業者は増え、アメリカ経済ははなやかな表面の下で加速度的に崩壊を始めていた。この時期に全国を商用で巡っていた March は、ある時には中西部、南部の地方で農民や労働者が不況にあえぐ姿を、ある時にははなやかな Roaring Twenties の光景を、New York をはじめ、多くの都会で見ていたにちがいない。そのそれぞれの社会における人々の生活の表裏を彼は誠実に受けとめ、鋭い観察眼で克明に描いていった。

次の短編 *A Sum in Addition* は、travelling salesmen である三人が、一日の仕事を終えて安ホテルに戻り、一杯やろうとして栓ぬきを探しているうちに、しわくちゃに丸められた一枚のホテル用便せんを見つける。それには、ある金策に困っている男が借金を表にして書き出し、この代金をある人から借りようと、くり返しくり返し〇〇から金を借りるという文をぎっしりと書きつめ、最後に（おそらく、諦めて）丸めて棚の上に放り上げたものであった。借金のリストとくり返し習字の練習のように書かれている文をめぐって、三人三様の感想が出てくるのだが、本当の主人公はそこに姿を表わさない、その便せんを書いた男であり、その内容（赤ん坊の葬式の費用、妻の入院費、家賃滞納3ヶ月分等）からその男の悲劇が克明に理解される。そしてこの一枚の便せんをめぐって三人は三様の想像を

する。ひとは、楽観的にきっと金を借りられて、すべて happy ending になっただろうと言ひ、ひとは、悲観的にまだ金を借りるメドがつかなくて（誰もが金に困っている時だから、その〇〇から借りられた可能性も決して高くはない）、きっとまだどこかの安宿で悶々と悩み続けているにちがいないと言ひ、最後にこの二人の話を全然知らずに部屋に戻ってきたひとは事情が分からず、いきなりその便せんを見せられて、散々考えた末に、ああ（借金のリストの）計算が間違っていると言う。三人ともいつも仕事の行動を共にし、おそらく互いの苦勞を判り合っている仲であり、自分たちの苦しさから他人の苦しさもよく分かる。

何ヶ月も家を留守にして、安宿に泊まりながら sales をしてまわる travelling salesmen も決して優雅な暮しではないが、この便せんの男は、度重なる不運の中でまさに貧困につぶされる寸前の状態にある。結局この男がその後どうなったのかは分からないけれど、誰も決して楽観的な結末を期待することはできないのである。

March は1932年から1937年にかけて何度かヨーロッパへ長期出張している。これはおそらく会社の事業の活路を不景気な国内だけでなく、ヨーロッパへも求めて行ったものであろう。この間に彼の処女作 *Company K* が New York で出版され（1933）、この後、1930年代に彼は多くの短編を発表した。

March がドイツにいた1933年にアメリカ大統領に就任した Franklin Roosevelt は、不況から立ち直るべく New Deal 政策を実行した。その頃ヨーロッパでは、Hitler の率いる Nazism が台頭し、戦争の危機が再び迫ってきていた。そしてアメリカは再びヨーロッパに不安の目を向けなければならなくなった。

1939年、Hitler のポーランド侵攻によって、ヨーロッパでは再び戦争が始まり、Great Depression は吹き飛んでしまった形となった。景気は

再び高騰し、失業は減少しはじめた。アメリカの景気の回復は、New Dealの成果ではなく、第二次世界大戦勃発のためであった。

アメリカが第一次世界大戦に参戦して以来、第二次世界大戦の勃発までの20数年間は、アメリカの国内が最も激しく揺れた時期ではなかったであろうか。その50年ほど前の南北戦争でも国は二つに割れて戦いが続いたが、1920年代にアメリカが直面した問題はさらに困難で複雑なものばかりであって、しかもそのどれもが解決されることなく、現在までへもそれぞれの形を残して、なお社会問題として残存している。アメリカは第一次世界大戦に参戦する前から isolationism, アメリカは独自の立場を守るという姿勢をとり続けてきたが、大戦が起ればそれに関わらずにはすまされないことを身をもって体験してゆくことになる。当時、世界の中心であった大西洋を挟んで、その一方でトラブルが生じれば、対岸の国はそのトラブルを無視し通すことはできない。結局追いつめられて、巻き込まれてゆく。第二次世界大戦も例外ではなかった。ヨーロッパとアジアで起ったこの大戦にアメリカもやがて参戦することになる。

1940年大統領に三選された Roosevelt は、その選挙演説の中で、アメリカの若者を外国の戦場に送り込むようなことはしないと公言しながら、翌1941年には、Hitler の Nazism 侵攻を防ぐためという理由のもとに米軍を再びヨーロッパへ派遣することになった。まず海軍を北大西洋に送り、ドイツ潜水艦を探索して連合軍の戦艦や戦闘機に無線で知らせる作戦を行い、同年4月、Greenland を占拠し、7月には Iceland を占拠した。2ヶ月後の9月、北大西洋でドイツ軍Uボートの動静を英軍機に知らせる行動をとっていたアメリカの駆逐艦 Green 号が、逆にドイツのUボート (U—952) に攻撃されるという事件が起きた。この時 Roosevelt は、Green 号は Iceland へ郵便物を輸送する途中であったと言明し、この事件を、Iceland 周辺海域におけるいかなるドイツ船舶をも発見次第攻撃す

るという言訳に利用した。⁽¹¹⁾

この約3ヶ月後、1941年12月7日、日本軍によるハワイ オアフ島の Pearl Harbor 奇襲が起きると、アメリカはその4日後に日本に対して宣戦を布告した。枢軸国 (The Axis) の一員である日本に対して宣戦を布告したことは、アメリカにとってヨーロッパにおいても堂々と戦う理由づけとなり、また、ヨーロッパのどの国に対して直接宣戦布告をするよりも、アジアの一国に対してする方が、ヨーロッパをそれぞれ祖先の国とするアメリカの国民感情にある救いを感じさせ、直接的敵としての目標をアジアに向けさせる役目を果すことになった。このために、この大戦中在米日系人だけが強制収容所に送られるという悲劇を生むことになった。

こうして第二次世界大戦は、ヨーロッパだけでなく、太平洋を中心としたアジア地域全体をも巻き込む、まさに世界大戦に発展していった。第一次世界大戦時の Wilson にせよ、第二次世界大戦時の Roosevelt にせよ、(そしておそらく他の多くの国の主導者も含めて)、大統領はいつも、参戦はしない、戦場へこの国の若者を送るようなことは絶対しないと公言しつつ、究極的には参戦、派兵してしまう。これは、大統領が国民を裏切ったとかいうことではなく、大統領の言葉が世の中の流れ、歴史の流れの強さに抗しきれなかったからとも言えるのではないであろうか。

March はこの頃すでに business の世界から引退し (1938年)、New York で文筆活動に専念していた。数々の短編集を出し、1943年には彼の作品の中で最も評価の高い *The Looking Glass* を発表している。しかし、1947年に戦争の後遺症として悩んでいた神経衰弱の発作におそわれ、静養のために故郷 Mobile へ移った。その後、彼が従軍した際に見たフランスの面影を強く残している New Orleans に移り、そこが彼の終いの住かとなった。病い癒えて1954年に小説 *The Bad Seed* を発表したが、前述したように彼はこの出版の二週間後に肺炎のため急逝したので、この本

がベストセラーになったことを知らず終いであった。

1954年の彼の死までに、March はさらに McCarthyism の台頭と、アメリカの朝鮮戦争派兵をみるのである。March の子供の頃には対スペイン戦争があり、青年期になると第一次世界大戦が起り、そのあと彼が実業界で必死に働いた時代は狂乱の Roaring Twenties であり、その終わりには Great Depression が待ち構えていたのであり、退職して静かな文筆生活に入ろうとした頃、再び世界大戦が起った。そしてこの戦争のあとアメリカは、世界の大国としての地位を自他共に認められるように、国力においても、国際的地位においても充実してくるのである。William March はまさに、アメリカが最も悩み苦しんだ時代を戦争の傷を肉体にも心にも負いながら、一市民として誠実に生きぬいた、おそらく善良なるアメリカ人のひとりであった。

注(1) March の生い立ちについては、*American Dictionary of Biography* および *Dictionary of Literary Biography* によった。

(2) Garraty, John A., *The American Nation* Vol. 2, Harper & Row, New York, 1975, p. 657.

(3) *ibid.* p. 661.

(4) allies (ally): *to unite two or more states by treaty

*states united with another in a common cause or by treaty

(5) associates: *partner, colleague

*one who shares with another an action

(4) & (5) are from *Webster's Third New International Dictionary*, G. & C. Merriam Co., Springfield, Mass, 1966.

(6) *American Dictionary of Biography*, New York, 1954, p. 99.

(7) Garraty, *op. cit.* p. 670.

(8) *ibid.* p. 682.

(9) *ibid.* p. 691.

(10) *ibid.* p. 713.

(11) *ibid.* p. 756.

参考文献

American Dictionary of Biography, New York, 1954.

Garraty, John A., *The American Nation* Vol. 2, New York, 1975.

March, William E., *Some Like Them Short*, 1981.

Martine, J., ed., *Dictionary of Literary Biography*, Vol. 9, Detroit, Michigan, 1981.

Spiller, R. E. and others, eds., *Literary History of the United States*, New York, 1963.